

「通訳ワークショップ」授業実践報告

山崎美保

(会議通訳者、関西大学、神戸女学院大学)

Abstract

The main purpose of this paper is to report on a 2017 interpretation workshop. In the workshop, students received peer and instructor feedback on their performance, listened to the recordings of their work and realized what they needed to improve by themselves. In addition, since a session for students to interpret a guest speaker's presentation where students went through a similar experience as that of a professional interpreter was included in the latter half of the course, students worked hard with a sense of purpose from the beginning. Due to both the established learning cycle and the sense of purpose, students demonstrated remarkable progress exceeding the college class framework.

1. はじめに

本稿では、関西地方のある私立大学において筆者が担当している「通訳ワークショップ」と題した授業について報告する。筆者は電機メーカーの海外営業担当部署で勤務後、通訳学校、大学院を経て会議通訳者として実務に携わると同時に大学で教鞭をとっており、自分の経験も織り交ぜた双方向の授業を心掛けている。本授業は、通訳翻訳を専門とする副専攻プログラムの履修者で、3年次において通訳翻訳の関連授業¹を履修済みの学生を対象に、英日・日英の実践的な通訳訓練を行うことを目的とした半期完結型の授業である。

今期は上述の履修条件を徹底し、受講人数を制限し、受講生は実質2名という極めて少人数であった。そのため半期という短い期間であっても従来の英日逐次通訳演習だけでなく日英の基礎通訳演習、日本語の音読、同時通訳演習、また学生がお互いの評価を行えるようにした。一人は訳出が難しくても、通訳の途中で黙り込んでしまわないように仕向け、もう一人は通訳の更なるスキルアップを図り、そして両学生とも通訳することに自信をつけさせるよう指

YAMAZAKI Miho, "A Teaching Report on "Interpretation Workshop," *Invitation to Interpreting and Translation Studies*, No. 18, 2017. pages 107-124. ©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

導した。加えて、大学の授業の枠を超え、実際現場に出てそのパフォーマンスをすればどう評価されるかという視点も組み込むことを目指した。

2. 本授業の基本的設計と学生の反応

本章では、当該授業の概要(履修者、到達目標、授業内容、評価表、授業外の自律学習の目標など)を述べるとともに、それに対する学生の反応を紹介する。

2.1 学生のレベルと到達目標

本科目の今学期の受講生は関西地方にある私立大学の外国語学部所属の学生で、2年次に1年間英語圏の大学への留学を経験している。英語力についてはTOEFL550点以上を取得しており、筆者の考えでは通訳訓練を始めるための最低ラインはクリアしているものと考えられる。当初受講生は3名であったが、そのうち1名が体調不良で欠席が続いたため、実質的に4年生2名(以下、学生Aおよび学生B)であった。学生Aは女性で2年次にユタ大学に留学し、本授業の受講目的は通訳技術の基礎をしっかりとスキルアップしたい、そしてきちんとした日本語を英日通訳の際に話せるようになりたいというものであった。彼女の大きな問題点は、内容が理解できない際および訳出が浮かばない場合一語も発せず、黙ってしまう傾向であった。また、学生Bは男性で同じく2年次にクイーンズランド大学に留学している。前年の受講者に「難しい授業だがためになる」と聞き、「就職活動で自分が通訳を勉強しているとPRしているにもかかわらず、他の皆よりうまいわけでもなく、恥ずかしいためしっかりと力をつけたい」という理由で本授業を受講した。第一回目のクラスでは人前で話すのを恥ずかしがる傾向があった。

この授業の到達目標はプログラム全体の目標との整合性に配慮しつつ、以下のように設定した。

- ・逐次通訳の基本的なスキルを習得するとともに、特に専門的でない内容の素材について「ほぼ十分な」レベルで英日・日英逐次通訳ができるようになること
- ・英語と日本語の双方にわたる高度な言語運用力およびコミュニケーション能力を身に付けること

また、筆者は同じ授業の担当が3期目である。過去の授業で、ともすれば学生特有の言葉遣いをしてしまいがちで、公式な場で使用すべき言い回しや用語に慣れていない学生が見受けられた。また、これまでは講師のみが評価をしていたため、学生は自分のパフォーマンスに対して評価を聞くだけで自分自身が通訳をするときに気を付けるべきポイントを能動的には理

解できていなかったと考えられる。これら前回までの授業からの反省に立って、追加すべき主な授業目標は以下のとおりであった。

・学生特有の言葉遣いをせず、公式な場で使用可能なフォーマルな言い回し、および聴衆が理解しやすい用語選択ができ、自信を持って通訳できるようになること

・通訳の評価を講師だけがするのではなく、学生たちがお互いに行うことで評価に慣れ、各自が自分の改善点を洗い出しパフォーマンスの改善につなげること

いうまでもなく、場にふさわしい用語選択をすることは通訳のみならず、社会人として必要なスキルである。今期の学生たちは必ずしもプロの通訳になりたいと本授業を受講したわけではないが、社会に出る前に社会人としてふさわしい言葉遣いを身に付け、また通訳スキルを武器として使えるようにしておくことも本授業で可能になると考える。

2.2 授業内容及び授業計画

前述の改善点を修正し、目的を遂行するため本授業における訓練は主として以下の授業内容を実施した。

- (1) 「通訳訓練データベース」²⁾に収録されている課題を使った英日通訳練習
- (2) 講師の指定する教材を使った日英のサイトトランスレーション練習
- (3) ピアスピーチ通訳演習(新聞記事などをもとに即興スピーチを行い、これを他の学生が交互に通訳する形式)
- (4) 学内外のゲストスピーカーを招いて行う通訳実践訓練

特に(4)は本授業の総仕上げと位置付け、学生自らがイニシアティブをとり、ブリーフィングを含む、プロの通訳が仕事を引き受ける際、実際に行っているプロセスを体験できるようにした(各訓練の詳細については山崎(2017)参照)。

授業期間中、講師が強調したのは、通訳者は通訳サービスを提供することが仕事であり、Gile (2009)が述べているようにスピーカーの分身として機能し、**enabler**(影の助力者)や**facilitator**(促進者)であるということである。さらにいうなら、**Sender**(情報発信者)からの情報を字面で訳すのではなく、メッセージを理解し、**Receiver**(情報受け取り手、聴衆)を **Sender** が意図するのと同じ目的地に導くことである。

では具体的な授業計画を下記述べていく。

授業回数	各回の授業内容	習得ポイント
	* 毎クラス最初に定形式辞表現テストもしくはオバマ氏広島訪問時スピーチ暗唱テスト	公式な場で使用可能な言い回し、用語選択スキルを習得する
第1回	学生によるお互いの自己紹介(英→日)、天声人語サイトトランスレーション(日→英)	学生間で使用されるカジュアルな言葉ではない、公式な場で使用される日本語及び英語を学ぶ
第2回	芦屋市国際交流協会会長スピーチサイトトランスレーション及び逐次(日→英)、クリントン氏スピーチ逐次(英→日)	VIP の挨拶が通訳できる(用語選択、態度、話し方も含めて)、事前リサーチのやり方を学ぶ
第3回 第4回	クリントン氏スピーチ逐次(英→日) 天声人語サイトトランスレーション(日→英)	メモとり、各種基本的なフォーマルな日本語および英語でのデリバリー
第5回	クリントン氏スピーチ同通(英→日)	同通方略
第6回	数字トレーニング、「通訳とは何か」逐次(日→英)	数字を正確に理解し、訳出する、メモとり、Visualization ³ や Segmentation ³
第7回	講師によるピアスピーチ逐次通訳	実際のスピーカーを前にスピーチの通訳をすることで、人前で落ち着いて不安感を出さずに訳出する、お互いの評価をし、評価のポイントを理解し、改善点を自分で洗い出すことが出来る
第8回	「通訳とは何か」逐次(日→英)	出来るだけ間を置かず訳出に入る、文の途中で訳出を止めないなどの訳出スキルを習得する

第 9 回	学生によるピアスピーチ逐次(英→日)	聴衆を意識し、相手に伝わりやすい話し方を実践的に学ぶとともに人前で話すことに慣れる
第 10 回	ゲストスピーカーセッション事前準備	プロの通訳が踏むプロセスを実践することで現場に慣れる。事前リサーチのやり方を学ぶ
第 11 回	ゲストスピーカーセッション逐次(日→英)(英→日)	ブリーフィングからスピーカー紹介、プレゼンテーションすべて学生が現場に近い形で通訳者としての実務を行う
第 12 回	ゲストスピーカーセッション復習	講師のフィードバックとともに今後の改善点を洗い出し、対策を考える
第 13 回	学生によるピアスピーチ逐次(日→英)	相手に伝わりやすい話し方を実践的に学ぶとともに人前で話すことに慣れる
第 14 回 第 15 回	期末テストと復習	情報量の詰まった題材にこれまで培ったスキルでどう対処するかを学ぶ

表 1 授業計画

上記授業計画(表 1)を作成する際、到達目標に達するために習得すべきスキルやポイントを列記し、それに合わせて教材を選択した。筆者が通訳を学んでいた際、毎回異なるテーマの教材にあたり、一つ目の教材をしっかり勉強して通訳できるようになったとしても、次の異なるテーマの教材ではまた通訳が上手くできなくなってしまうことがよくあったという経験から、本授業では、教材の難度に合わせて取り扱う頻度を増やした。また、毎回学生にどのような通訳練習およびどのような教材を扱うのかという説明をして授業を展開したが、合わせて取り組む教材と練習を通してどのようなスキルを習得できるかを第一回目の授業、もしくは、各授業で

学生に説明・明示化し、学生が一層意識的に取り組めるよう配慮した。加えて、学生の個々のパフォーマンスに対するフィードバックを下記評価表(表 2)をもとに与えた。

また、上記の授業計画(表1)を第一回目の授業で学生に提示することで、学生たちにゲストスピーカーセッションという、自ら培うスキルを使って、見ず知らずの聴衆の前で通訳を実践する機会があるという認識を授業の初期の段階で持たせ、授業内、および自律学習に関してただ漫然と取り組むのではなく、セッションを目標としてモチベーションが維持させる。これはミネソタ・ニューカントリースクール(MNCS) で開発され、「自律学習の育成」を目標とする現代にふさわしい学びのスタイルとして10数年にわたって実践されているProject Based Learning にあたると考える(日本 PBL 研究所。新崎(2017)も参照)。MNCS のウェブサイトによると Project Based Learning とは学生が自分に直接かかわる課題や問題に対し、時間をかけて対処法を考え知識やスキルを得る教授法であり、あくまで学生主体で行われ、教師はファシリテーターもしくはアドバイザーとして見守るものである。ゲストスピーカーセッションで成果を発揮することを目的に学生を能動的に学習し続けるように授業計画を作成した。

2.3 評価表

評価表(表 2)は受講生のパフォーマンスに対し、より具体的に改善点を指し示し、今後に生かせるようにという目的のもとで使用している。訳し漏れ、文法的間違い、ノートテイキングなどに加え、コミュニケーターとしての通訳を意識し、話し方や必要な補足を行っているかなどを評価項目として挙げている(詳細は山崎(2017)参照)。授業後半に行われるピアスピーチ逐次通訳では通訳のみならず、各自スピーチも行うため、上段にスピーチに関する評価項目(言い換え、文法的間違い、簡潔さ、話し方、音声的要素)も含まれている。前年度の授業において、日英ゲストスピーカーセッションの評価を行った際、既存の5項目だけでなくデリバリーに必要な適切な英語の発音の評価の必要性を感じたため、日英通訳に関しては「英語の発音がコミュニケーションの役割を果たすのに適切か」という項目を追加している。従って、評価表の点数としては英日は5項目各5点の25点満点、6項目各5点の計30点満点となっている。

即興スピーチのピア通訳演習（逐次）評価表 評価者： _____ 日付： _____

スピーカー		通訳者	
使用言語	英 / 日	通訳方向	日→英 / 英→日
トピック		スピーチの長さ	

評価方法：各項目について5～1のスケールで評価（5が最高点）。原則として各項目について「5」であることを想定した上で、被評価者のパフォーマンスに応じて順次得点を減じていく。（※4=いくつか問題点はあるものの、とくに致命的なものではない。3=いくつか顕著な問題点があり、今後の改善が期待される。2=重大なものを含む多くの問題点があり、今後の一層の努力が求められる。1=完全な初心者レベルであり評価に値しない）。

スピーチ	(5-1の該当箇所に○)	評価者コメント・メモ
1 参照したテキストや情報ソースを、必要に応じて適切に言い換えている（i.e. 量と質）	5 4 3 2 1	
2 文法的エラーのない適格な英文になっている。	5 4 3 2 1	
3 スピーチの内容は簡潔・明瞭で、かつ論理的に構成されている。	5 4 3 2 1	
4 単なる原稿の朗読ではなく、聞き手を意識しながら、わかりやすく語りかけている。	5 4 3 2 1	
5 発音やイントネーション、アクセント等の音声的要素は円滑な意思疎通を成立させる上で十分に適切なレベルにある。	5 4 3 2 1	
6	5 4 3 2 1	

通訳	(5-1の該当箇所に○)	評価者コメント・メモ
1 訳し漏れや誤訳がなく、原テキストの内容がほぼ十分なレベルで再現されている。	5 4 3 2 1	
2 訳文は文法・語法的に的確で、論理的にも破綻のないものになっている。	5 4 3 2 1	
3 適切な話し方や態度、タイミングで通訳ができていく（i.e. 声の大きさや質、発話速度、[過剰な]フィラーの使用や言い淀み、および発話時の姿勢や態度、表情等の非言語的要素を含む）。	5 4 3 2 1	
4 必要に応じて、発話内容に関する適切な補足や編集（または円滑な意思疎通を成立させるための言語的・語用論的配慮）がなされている。	5 4 3 2 1	
5 必要に応じて適切なノートテイキングができていく。	5 4 3 2 1	
6	5 4 3 2 1	

必要に応じて項目を追加

備考

(C) 2015 Yutsumasa Someya. This evaluation sheet is photocopyable.

表 2 評価表

2.4 授業外の自律学習

授業外での自律学習としては、各授業で扱う素材の事前リサーチ、重要語句のクイックレスポンス練習、また授業後の復習(シャドーイング、リプロダクション、サマライゼーション、ディクテーション)を課した。加えて数字トレーニング(日本語で数字を言った後すぐに英訳する、またその逆)も授業で扱った後、自律学習として課し、宿題として日英スピーチ(第2回授業)や天声人語のサイトトランスレーションも与えた。また、学生特有の言葉遣いをせず、公式な場で使用可能なフォーマルな言い回し、および聴衆が理解しやすい用語選択ができるようにすることを今期の具体的な目的の一つとして掲げているため意識して新聞を音読するよう指導した。これらの言い回しや用語選択は、訳出の際によく課題となる敬語も含めて一朝一夕では蓄積できない。新聞は Gile (2009)が述べているように、日常使用している言葉より会議スピーチに関する言葉や表現がよく記載されているマテリアルであり、日常的に読むことで、Gile が述べる通りの、語学力以外に通訳者が必ず持っているなければならない *adequate world knowledge*(十分な一般知識)も磨いていくことが出来る。

2.5 毎授業の流れ

授業では毎回冒頭のテストの後、授業で実際の通訳を行い、評価表をもとに、講師からのパフォーマンスへのフィードバックを即時与えた。先述のように学生たちは3年次において通訳理論などの通訳プログラムを履修済みであるため、本授業の位置づけとしては通訳トレーニングの初期の段階で効力を発するプロセス志向アプローチを補完する従来型の、結果重視で修正を加え、微調整をするプログラム(Gile 2009)である。そのため *end product*(最終成果物)にこだわり、筆者は毎回の学生のパフォーマンスに対するフィードバックを重視した。

また、授業は CALL 教室で行われており、英日・日英の基礎的な通訳演習からすべて各自のパフォーマンスを録音することが可能であるため、各自録音を聞き、自分で自分の改善点を「気づく」体験をし、感想をほぼ毎回提出させた。コミュニケーターとしての姿勢やアイコンタクトも重要であるため時には録画も行い、録画を見ながら復習させた。

基礎的な訓練終了後、第7回目の講師のピアスピーチ逐次通訳演習からは評価表をもとに学生間でもお互いに評価させることで、どのようなところに注意したらよいのか、他者のパフォーマンスから自発的に学べるようにした。

学習者はこれらの評価項目を頭に入れ、稲生他が述べているように自分で気づくことにより教員から指摘されるより意識的に取り組むようになる(2010)。また、最終的には Dakin (1973)が述べているように学生が自分をモニターすることが出来るようにならなければいけない。つまり学習者は自分のフィードバックシステムを構築、自身でその効果を検証する必要がある(池田

2002)。従って本授業では講師のフィードバックとともに、自分でも録音録画を聞いて、「気づく」体験を通して、各自のシステムを創り出すことを狙いとしている。

3. 結果

学生 A は、通訳の途中で訳出が浮かばないと黙り込んでしまう傾向があったが、後述するように、授業終盤までにはほとんどその傾向はなくなり、よどみなく訳出することが出来るようになった。学生 B も人前で堂々と通訳できるようになり、通訳訓練の実践の場と位置付けている 11 回目ゲストスピーカーセッションにおいて、学生 A も B も予想を上回る成長をみせた。これについては詳しく後述するが、彼らの成長の過程をまず、各自のパフォーマンスに対してどのようなフィードバックが与えられたのか、そして、フィードバックを受け、各自録音録画を復習してから、どのような感想(気づき)を得たのかを考察しながら報告する。

3.1 フィードバックとそれを受けての受講生たちの感想

講師から学生に評価とともに与えられたフィードバックは、学生の通訳能力の伸びとともに、基本的な命題や *linguistic competence* に関するものから、Hedge (1985)が述べている *subject-specific knowledge* を得るための事前リサーチ、メモとりやモデリング、そして現場での体験に基づいたアドバイスやなどの頻度が上がっていった。通訳コースの教育目標として最も多く意識されているのが「語学力の強化」である(染谷他 2005)という現状に鑑みると、本授業は通訳を教えるという本来の通訳コースの目的に合致したものであると考える。

講師及び仲間からのフィードバックを受け、録音録画を聞いて、毎回受講者はどのような感想を提出しているのか、下記、抜粋して掲載する。

3.1.1 学生 A 第 7 回目の講師によるピアスピーチ逐次通訳後の感想(気づき)

まず最初に、第 7 回目の講師によるピアスピーチ逐次通訳(図 1)後の学生 A の感想(気づき)を掲載する。これは、各学生が任意の新聞記事(英文記事)を取り上げ、その内容を自分の言葉にしてスピーチを行い、クラスメートが逐次通訳を行う「ピアスピーチ逐次演習」の予行演習と位置付けられるが、前年度の授業までは時間の余裕がなく行えなかったものである。前年度スピーチ自体に慣れていない学生もいたことの反省を生かし、今期は実際の演習前に、下記図 1 のように講師がスピーチを行い、受講生に通訳をさせ、模範となるパフォーマンスを確認させた。



図 1 講師(左側)によるスピーチの逐次通訳演習の様子

学生 A の授業後の感想

- ・沈黙が長くて聞き手が不安になる。もっと詳しく下調べをしていたら、少しは違ったかなと思う。聞きながらメモを取っていると聞き逃してしまい、沈黙が生まれるので(聞きながらメモを取ることに)慣れる必要がある。
- ・日本語が幼稚
- ・不安感とか感情が表れすぎている
- ・事前にもらった glossary や新聞記事にないことを言われた瞬間、焦り、訳しミスをする。

上記の感想には、授業中の講師のフィードバックで指摘されている箇所以外の問題も含まれており、与えられたフィードバックをもとに、録音録画で改善点を再認識するとともに、自ら気づいた箇所も記入していると考えられる。講師からは上記の感想を踏まえて、フォーマルな日本語に出来るだけ触れる回数を増やすため新聞記事の音読を再度勧め、他に配布資料以外のリサーチも必須であることをと指導した。感想では、学生が自分で今後どのように訓練したらいいかというところまでは踏み込めていないので、そこまで考えることを促し、フィードバックからのサイクルをさらに確立できるよう指導した。

3.1.2 学生 B 第 5 回クリントン氏スピーチ同時通訳後の感想(気づき)

続いて学生 B の第 5 回クリントン氏スピーチ同時通訳後の感想(気づき)を掲載する。クリントン氏スピーチは 1 文の長さが長く、内容が凝縮されていたので、第 5 回授業では第 2~4 回授業で行った内容を再度確認させ、シャドーイングを行った後、同時通訳を 5 分間させた。

学生 B の授業後の感想

訳出するまでに時間がかかっている。これを克服するためには繰り返し練習して、聞きながら話せるようになる必要がある。または長い文を簡潔にまとめて短い文で話すようにするのかどちらかであると思う。すべてを訳出することは不可能であるので、同時通訳をする中で取捨選択することも必要だと感じた。また発話の内容をよく聞いて次にどのような内容が話されるのか予想することで訳出が少し早くなるのではないかと思う。

繰り返し練習、長い文を簡潔にまとめて短い文で話す、内容の取捨選択(すべてを訳出するのは無理)、anticipation(次の内容を予想する)など授業中に指摘されたすべての重要なポイントを再認識し、今後の方略まで踏み込んでいる。

3.2 ゲストスピーカーを招いての通訳実践訓練

授業第 10 回目から第 12 回目には、最後の総仕上げとしてゲストスピーカーを招いての通訳セッションを行った。第 10 回はゲストスピーカーセッション準備、第 11 回がゲストスピーカーセッション本番、そして第 12 回はレビューセッションとして自分たちの通訳パフォーマンスを批判的に振り返る機会とした。この通訳セッションは本授業の総まとめである。本番に近い状況下で相当の緊張感を持ちながら、これまで習得してきた基礎的な通訳スキルを、実際の通訳場面に近い状況で実践的に応用するとともに、各自が今後の学習のための課題を見つけ出す場として位置付けている。今期のゲストスピーカーは関西地方のある私立大学大学院に在籍する米国人院生である。日本語も堪能なため、日本語と英語両方でのスピーチ(各 15～20 分程度)をお願いした。

3.2.1 準備、ブリーフィング、本番環境

ゲストスピーカーより、日本語と英語によるスピーチのタイトルが、前者は「留学 10 年目の秋」、後者は”Microaggressions: individual rights, responsibility and postmodern sensibilities”であることが本番一週前にあらかじめ示され、例年行っている、タイトルから内容を推測してのリサーチ、単語帳づくりなどの事前準備を行った。日英の原稿は本番の 3 日前に提示されたので、各自が訳を付けて準備できたが、英日のラフアウトラインについては受け取りが本番の前夜 21 時であったため、その後講師がキーワードを抜き出し(17th Century European industrial revolution /Jean Baudrillard Simulacra and Simulation – “a real without origin or reality”/ Declaration of Independence, Constitution and Bill of Rights 等)、皆で手分けしてリサーチし、その後全員で共有した。その上、当日本番開始 30 分前のスピーカーとのブリーフィングにお

いて、前夜に提示された英語スピーチラフアウトラインへの追加事項(前週発生したバージニア州でサンダース支持者による政府関係者の銃撃事件など)が加えられるなど、本番までスピーカーが内容を練ったため、結局英日の原稿は提示されず、図らずもかなりタイトなスケジュール、かつ難解な内容(特に英語)に取り組むことになった。

しかし、現場では本番ぎりぎりもしくは本番中にパワーポイントをどっさりと渡されることも少なくないことを考えれば、本授業の狙いである実際の業務に役立つような実践型の授業になっていると推測される。また日英両方理解でき、訳出の間違いを指摘できるスピーカーや外部からの聴衆(専任教員と学部生 3 名)の前でパフォーマンスをしなければならないプレッシャーもかなりプロの現場に近いと言えるだろう。

3.2.2 評価および聴衆からのフィードバック

本番は、スピーカーの紹介に始まり、日英スピーチのタイトルの紹介、日英スピーチ、Q&A、英日スピーチのタイトルの紹介、英日スピーチ、Q&A の順ですべて受講生がイニシアティブをとって行われた。時間的には予定よりかなり延長し、これらすべてで 1 時間半となった。

日英に関してはほとんど事前入手した原稿通りであったので、チャレンジとなる英日に焦点を当てて説明する。英日に関しては 95wpm、セグメントは 10~30 秒、アメリカ英語できわめて専門的な内容であった。しかしながら学生 A、B とも命題に関する訳出のエラーはほとんどなかった。

上記のプレッシャーの中、学生たちは終始落ち着いており、原文が終わってからすぐ訳出を開始できるようになり、わからない点は途中でスピーカーに聞きかえしていた。学生 A に関しては、「権利をはく奪する」、「かいつまんで言うと」などの、日本語の音読が奏功したと考えられる素晴らしい表現が訳出に随所に見られた。”Do Japanese people have the right to make conversation when they ~”を「日本人の権利はどうでしょう？彼らが～」と Segmentation を実践し、2 つのセグメントに分けていて聞きやすい訳になっていた。また”Remember ~ “の箇所を「思い出してみてください」と聴衆に呼びかけていたところにも、授業中に講師が行った、スピーカーが聴衆の注意を惹きたいという意図が感じられる場所はその意図を組むようにとの指導をしっかりと実践していた。学生 B に関してはぎりぎりのタイミングで受け取ったアウトラインをもとに事前リサーチをしっかりとしたと思われ、ブリーフィング時の追加情報と合わせて、細かい所まで訳出できた。バージニア州の銃撃事件はセッション直前のブリーフィングで得た情報であるにもかかわらず、”The suspect in Virginia also had ~”を自信をもって正確に訳出できていた。また、スピーカーの話の転換点となる、”What defines being marginalized?”という一文も「何を

もって阻害されているというのか」という的確な訳出が出来ていた。特に最後の結論部分で時折観客とアイコンタクトを取りながら、観客に畳みかけるように通訳していて、説得力があった。

Q&A に関してはお互い助け合いながら、各質問毎に順番に行い、慌てることなく適切な日本語および英語を使用していたが、最後の英日の Q&A では 3 回スピーカーに聞き直す場面があった。おおよそ一時間半逐次通訳をし続けていたことで集中力の限界となったのであろう。これは経験を積むことで改善できると考えられる。

二人ともノートテイキングに関しては日英で原稿をそのまま読み上げている箇所や各自が事前にリサーチしているところは記号や矢印が使用されていたが、Q&A の箇所になると文が多用されていたので、引き続き記号や矢印を使用するようにするなどメモりの指導を行った。

評価表のスコアとしては学生 A 日英 26.5/30 点 英日 19.5/25 点 学生 B 日英 28/30 点 英日 22/25 点のいずれも高得点となり、第一回目の授業で自信がなさそうに小さな声で通訳していた頃と比較すると、飛躍的な成長を見せた。

下記は聴衆からのフィードバックである。英日、日英どちらも掲示する。

英日

- ・サポーターやポストモダニティなどたくさんのカタカナ語が出てきましたが、それをどこまで訳し、そのまま使うかも重要だと思いました。
- ・英語の主述から日本語の順序に訳すのは難しいがどのように聞いている人に分かりやすく訳すかが大切だと感じた。
- ・ポストモダニズムを訳すうえで産業革命が出てきたが歴史的時代背景もしっかり理解していることが大事だと思った。
- ・難解な内容にもかかわらず論理立てて、しっかり訳出できていた

日英

- ・日本語らしい倒置法とか主語のない文にも対応していた
- ・～の秋、「遠慮と察し」などの訳がよかった
- ・訳すときにしっかり前を向いていた、長く難しい文も的確にスピーディーに訳していた
- ・安心して聞くことが出来た。柔軟、迅速に対処できていた。

本授業での総まとめであるゲストスピーカーセッションで、聴衆から上記のような感想をもらえるくらいまで学生たちは成長し、その成長の幅は予想を上回っている。

3.3 まとめ

以上から、本授業の到達目標である、「逐次通訳の基本的なスキルを習得するとともに、特に専門的でない内容の素材について『ほぼ十分な』レベルで英日・日英逐次通訳ができるようになること」および「英語と日本語の双方にわたる高度な言語運用力およびコミュニケーション能力を身に付ける」及び、前述の受講生の当初の受講目的も達成したと考えられる。ゲストスピーカーセッションでは到達目標を上回る、専門的な内容のスピーチにも挑戦し、またその後のQ&Aでも適切な日本語及び英語で訳出していた。また、就職活動中の4年生という事もあり、受講生のパフォーマンスから今期の目標として当初掲げていた、「学生特有の言葉遣いをせず、」という箇所は当初からおおむねクリアできていたが、それ以外の、「公式な場で使用可能なフォーマルな言い回し、および聴者が理解しやすい用語選択ができるようにすることで、通訳に自信を持たせる」こともクリアできたと考える。前述のように受講生は受講の目的としてプロの通訳になることを挙げているわけではなかったが、訳出中に時折、講師が驚くような適切な用語選択が出来ていたことを考慮すると、その場その場にあった、またさらにこなれた用語選択が出来るようになっていく。これらは社会人としてのコミュニケーションに必要とされるスキルであるので、本授業により通訳教育以外の面でもプラスの効果をもたらされたと推測される。加えて前述のフィードバックを受けての気づきをもとに自己修正し、ゲストスピーカーセッションで実力を発揮したと推測されるため、「通訳の評価を講師だけがするのではなく、学生たちがお互いに行うことで評価に慣れ、各自が自分の改善点を洗い出しパフォーマンスの改善につなげる。」も達成できたと考える。

4. 学生たちの成長の鍵—今後に向けて

学生たちの成長の鍵となったのは①ただ単に与えられた課題に取り組むのではなく授業後半に行われるゲストスピーカーセッションというプロの現場方式の体験への目的意識②講師や仲間からのフィードバックを得て、実際に録音録画で自分のパフォーマンスを見直し、自らの改善点に自発的に気づき、今後に生かしていくサイクルの確立にあったと考えられる。ゲストスピーカーセッションでは、講師の助けなく自分たちだけでパフォーマンスをしなければならず、自分たちが培ってきたスキルが否応なくさらされてしまうため、それを目標として努力するという目的意識が大きかったと思われる。またパフォーマンスの録音録画を聞き、改善点を見つけ、今後に生かすというサイクルの確立も同様に彼らの成長の鍵になったと考えられる。

4.1 目的意識

授業の後半にある授業の総仕上げとなるゲストスピーカーセッションでは、前述のように学生自らが主体となり、プロの通訳が行うプロセスを実際に体験する。特に本番のパフォーマンスでは講師の援護は一切ない。ゲストスピーカーの声が聞こえなくても、訳出が浮かばなくても、プロの現場と同じように、これまで培ってきたスキルを発揮し、自分たちでどうにか対処するしかないのである。このセッションを目的とした、**Project Based Learning (ibid.)**を導入し、日頃からの努力への強いニーズを感じさせる場面を作ることで目的意識を持たせ、本授業の基礎訓練や授業外の自律学習を能動的に取り組みせ、ただテキストを読むだけではなく、意識的にアウトプットをし、実際の手ごたえを感じさせる。半期という短期間ではあったが、ゲストスピーカーセッションを目的とした **Project Based Learning** により、受講生が能動的な学習を日々続けるモチベーションを維持することが出来、成長につながったと考えている。

4.2 自分で「気づく」プロセスから今後改善するサイクルの確立

本授業では、授業中に自分のパフォーマンスに対して、講師やお互いからの評価やフィードバックを受け、録音録画を聞き、指摘された点を再確認し、他の要改善点に「気づき」、今後の強化法を考える作業を毎回行った。これにより、このサイクルが習慣化され確立されたと考える。このサイクルは言うまでもなく、通訳訓練以外にも、社会に出る準備としても良い習慣であると考えているが、今後ますますこのサイクルを発展させ、自分のパフォーマンス以外にもクラスメートのパフォーマンスを聞いて、「私だったらこのように訳出する」という **critical thinking** の視点 (新崎 2017) へと高めていくことが有益と考える。

4.3 今後に向けて

上記のように、本授業では各パフォーマンスに対するフィードバックを与えたが、学生の通訳能力が到達目標までの道のりの中で、今どの位置にいるのかという視点に立ったフィードバックも必要と考えるため、来期はその点も従来のフィードバックに付け加えていきたい。そのため各授業で習得できるスキルのルーブリックを作成し、現在使用している評価表を使用している個々の評価に加えて、フィードバックしたいと考える。

さらに、現在使用している評価表への内容追加を提案する。本評価表は訳出だけではなく、コミュニケーターとしてのパフォーマンスも注視し、姿勢やアイコンタクトなども評価の対象になっており、学生がお互いに評価することで自分の改善点に気づく **facilitator** にもなっている。今

回は図らずも授業後半になるにつれ点数があがっているが、教材によって難度が異なるため、難度が上がれば、点数が下降する可能性がある。筆者の経験から学習者が毎回の課題の成果を明示化された数値で確認でき、回を追うごとに成長を自分で自覚し、モチベーションを上げることができたらと考える。例えば、教材をその速さ(wpm)、アクセントや発音、セグメントの長さ、および専門性の高さでレベルわけし負荷が高ければ高いほどポイントを上げる。そのポイントの評価表に加算する。そうすることで、教材の難度が評価表に反映されるという仕組みである。そうすれば、難度が上の教材に挑戦しても点数的には必ずしも下がることはなく、systematicに授業を展開でき、最終到達目標までの学習者の成長の明示化が可能になるのではないかと考える。

また、毎度提出させている学習者自身のフィードバックにも感想だけではなく、これらの今後必要な自律訓練を各自考えて書かせるよう仕向けているが、講師が考える、今後必要な自律訓練として短期記憶トレーニング、背景知識、メモとりなどの欄を設け、講師が○をして学生に指針を示すことが出来ればさらによいのではないかと考える。

加えて、学生たちにさらに意識的に取り組ませるため、習得できるスキルやポイントを各クラス冒頭に伝え、明示化し、学生に再認識させる。そして、コースの最後には、毎回学生に前授業での各自のパフォーマンスについて提出させている感想をポートフォリオにして提示して、各自の進歩を実感させたいと考える。

5. まとめ

以上、現在筆者が担当している大学生向けの通訳クラス「通訳ワークショップ」の授業から得られた知見や今後の目標について概観的に報告した。本授業において受講生が通訳スキルを磨くことが出来たことは勿論だが、その過程において導入した Project Based Learning による受講生の能動的な学習を維持することができ、またフィードバックを受け、自分で自分のパフォーマンスを聞きなおし改善点に気づくサイクルも確立できた。これらは社会に出る準備として必要であり、受講生が今後実社会に出てからも役立つと考えられる。今後は他者のパフォーマンスも確認し、自分だったらどう訳出するかという批評的視点も盛り込んでいきたい。またさらに学生のモチベーションを高め、意識的に取り組ませるため、到達目標に基づき設定されている毎回の授業で与えられるスキルの意識的な明示化やルーブリック化のみならず、評価表の項目追記などを実施していきたい。各自の感想をポートフォリオにしてさらに自信をつけさせたいとも考えている。来年度からも今年度の反省をもとに、学生の通訳スキルを磨き、また通訳スキルに自信を持たせられる授業を展開したいと思う。

【謝辞】本授業の実践にあたっては関西大学の染谷泰正教授に授業プランの作成から CALL 機器の使用方法、ビデオ収録の説明まで、一方ならぬお世話になった。また日本通訳翻訳学会第 18 回年次大会で発表した折に頂いた質問や助言に沿って加筆修正を加えた。この場をお借りして心よりの謝辞を申し述べたい。

.....
【著者紹介】山崎美保(YAMAZAKI Miho)会議通訳者。関西大学および神戸女学院大学非常勤講師。連絡先は hisamanao2017@gmail.com

.....
【註】

- 1) 通訳概論、翻訳概論、通訳翻訳の理論と実技、通訳演習(ビジネス通訳、観光ガイド通訳、コミュニティー通訳)、翻訳演習(文芸翻訳、字幕翻訳、実務翻訳)、文化翻訳論など。
- 2) K大学の授業用教材として開発されたオンラインの通訳訓練教材データベースを指す。現時点で、23 ギガバイトにおよぶ音声および動画データが収録されている。
- 3) 確実な逐次通訳能力を養成するために新崎(2016)が望ましいとする、Roberts(2014)が提示している正確な通訳をするために短期記憶力を高める 10 の訓練方法から使用。

【引用文献】

- Dakin, J. (1973). *The language laboratory and language learning*. Essex, UK: Longman Group Ltd.
- Gile, D. (1995/2009). *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. Amsterdam, Netherlands: John Benjamins.
- Hedge, T. (1985). *Using Readers in Language Teaching*. London: Macmillan.
- Minnesota New Country School. (n.d.). [Online]
<https://newcountryschool.com/project-based-learning-pbl/> (Oct.1,2017).
- Roberts, R.P. (2014). Enhancing short-term memory for accurate interpreting, *The ATA Chronicle* 43 (7), [Online] <http://techinput.com/news/enhancing-short-term> (Sep.17, 2017).
- 池田和子(2002)「逐次通訳演習における教室内でのペアワークの効果」『通訳翻訳研究』第 2 号 pp.139.
- 稲生衣代他 (2010)「日本における通訳教育の課題と展望 日本通訳翻訳学会・通訳教育分科会 2009-2010 年度プロジェクトより」『通訳翻訳研究』第 10 号 pp.269.

新崎隆子(2016)「英日逐次通訳における記憶の負担と訳出制度」『通訳翻訳研究』第 16 号 pp.17.

新崎隆子(2017)「通訳教育の課題と研究の展望」日本通訳翻訳学会第 18 回年次大会プレカンファレンス

染谷泰正・斎藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代(2005)「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳翻訳研究』第 5 号 pp.296.

日本 PBL 研究所(n.d.) [Online] <http://pbl-japan.com/pbl.html> (2017 年 10 月 1 日)

山崎美保(2017)「通訳ワークショップ(2016 年度)授業実践報告」『The Edgewood Review』第 43 号